秩父の記憶の継承

八代研究室
01612057　柴岡　俊矢

１．はじめに

秩父市では近年、人口減少と少子高齢化により活気が失われつつある。

原因としては若者が秩父市を離れ、仕事や利便性を求め、市外へ出ていってしまうことが挙げられる。

そこで、市外へ出ていった人にとって、思わず帰りたくなるような魅力的な場所があれば市外へ出た人のＵターンが期待できるのではないかと考え、本研究を企画した。

２．歴史

秩父市は、江戸時代より絹の町として栄えた。

その繁栄の背景には、江戸の町が木と土と紙でできた燃えやすい町であったことがある。

当時の江戸の町では火災が頻繁に起きており、家財が失われていた。そこで、大店の商人達は火災を防ぐための神頼みとして、江戸に流れる水である荒川の水源の三峯峠にある三峯神社に参拝していた。

当時の移動手段は徒歩であり、当然途中で休息をとる必要がある。その休息の場所となったのが、現在の秩父市にある番場通りである。

番場通りは秩父市の中心にあり、（図１）にある秩父三社（秩父神社、宝登山神社、三峯神社）の一つである秩父神社の参道である。

番場通りで休息をとった大店の商人達は、江戸から文化を広め、更に秩父の名産である秩父銘仙と呼ばれる絹を大量に買い付けていき、江戸へ持ち帰った。

この秩父銘仙によって生まれた財により、秩父市は番場通りを中心に文化的にも経済的にも発展していった。例として、秩父神社の例大祭である秩父夜祭において、曳行される山車等に豪華絢爛な彫刻などが施され、今日にも残っている。

３．計画意図

本計画では、（図２）の団子坂と呼ばれる坂に設計を行う。

団子坂は、秩父市民の魂とも呼べる秩父夜祭において、六基の山車が登るクライマックスを飾る重要な坂であり、秩父の核となる場所であることから、団子坂を発展させることにより、団子坂を中心に、波及的に秩父市全体が発展していくのではないかと考え、団子坂への設計を行うことにした。

４．計画概要

秩父市は盆地であり、坂の町でもある。

武甲山を代表する山に囲まれ、谷には荒川が流れ、市街地は河岸段丘地形と呼ばれる、階段上の地形になっており、多くの坂が存在する。

これらの要素を団子坂に詰めることで、（図３～７）の様に秩父市の中に小さい秩父市を再現した。

具体的にはまず盆地という事で、坂を山の１つに見立て、坂の下の道を、これもまた山に見立てた建物で囲うことにより盆地を再現する。

次に、秩父市は河岸段丘地形で階段状の地形だという事で、周囲の建物を階段状に凹ませることで再現する。この階段には、祭りの日における観覧席、いわば劇場的な役割を持たせることにより、秩父夜祭におけるクライマックスである山車が団子坂を登っていく様をより見やすくし、秩父の魅力を秩父内外にアピールする事ができる。

５．おわりに

少子高齢化や市外への移住による衰退は秩父市だけでなく、様々な市町村に、特に地方によく見受けられる現象である。

本計画では、印象的なランドマークとなるものを作り、市民に地元への関心を持たせることにより、地元愛を深め、地方の衰退を防ぐ事を一つの方法として提唱する。

【謝辞】

秩父の歴史や秩父の現状について詳しく教えてくださった秩父開発機構代表取締役社長山口民弥氏にこの場をお借りして御礼申し上げます。

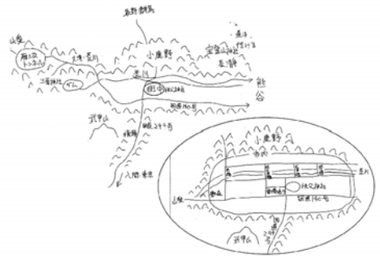

図１：秩父イメージ地図

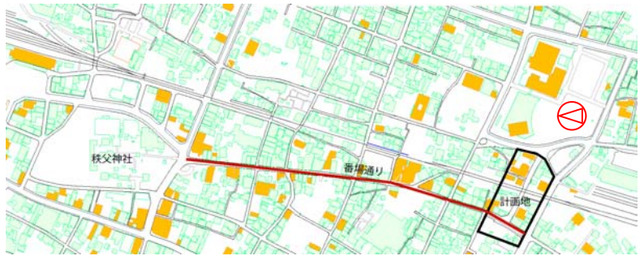

図２：周辺地図

図３：設計イメージ

図４：敷地図

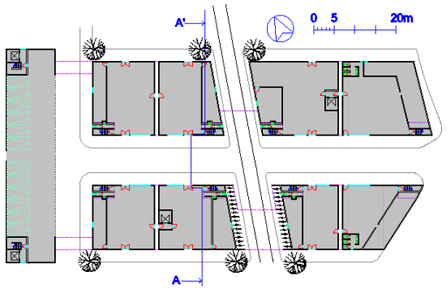

図５：一階平面図

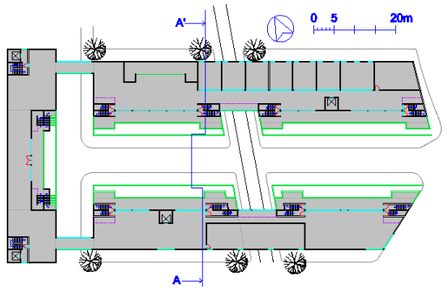

図６：三階平面図

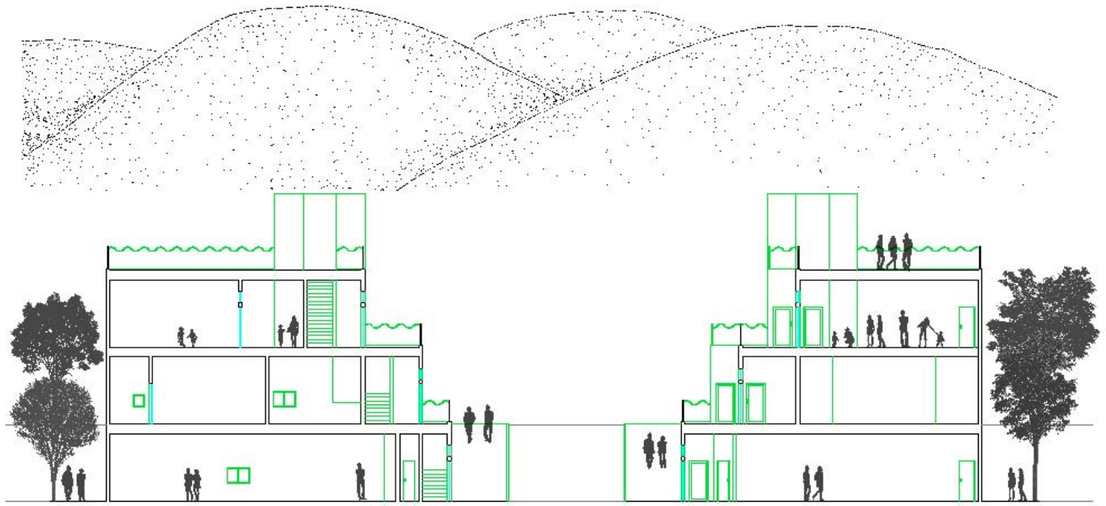

図７：断面図